

# 体長組成から年令組成を求める方法についての吟味

(日本海大羽イワシについて)

山 中 一 郎

A discussion on the methods estimating age composition  
from body length.

Ichiro YAMANAKA

## Synopsis

The precision of several kinds of methods estimating age composition is discussed mathematically.

(1) Assuming that the body length of a certain age distributes normally, and putting the proportions of each age as unknown parameters, the least square method is available to solve them.

In this case, many causes of error act orthogonally and the precision is not so good when the growth rate is not so large compared with the range in an age, and moreover the procedure of computation is tedious.

(2) Stratifying samples drawn according to length, the age composition in every length interval is estimated and is summed up.

In this case, the precision is superior to the former. But the procedure of stratifying is not always available in the field work.

(3) The direct sampling for age determination is desirable in the viewpoint of mathematics, but the number of samples necessary for this purpose is pretty large even if the age determination is complete. It is the problem of practice.

## 1. 緒 言

現在行われているイワシ、底魚等の資源調査の中軸は、標本調査によつて体長組成を求めることにおいているが、これは生物学的研究によつて体長と年令との関係を求め、体長組成を年令組成に引きなおすためであるが、この場合、体長組成の精度はあらかじめ計画することが出来るのであつて、このようにして間接に年令組成を推定する場合に於ての精度がどのようなものであるかを知つておく必要があるので、日本海流網による大羽イワシについて検討して見た。

体長組成から年令組成を求める方法として考えられる方法は、

(i) 各年令毎に体長の度数分布を求め、これから各体長毎に年令組成を未知数とする連立方程式を作り、最小自乗法によつて解く方法、すなわち、ある年令  $t$  の魚体が体長階級  $(x, t+\Delta x)$  にある確率を  $P_t(x)\Delta x$  とする。又  $t$  才魚の全母集団中の組成を  $A_t$ 、又全年令を通じて体長階級  $(x, x+\Delta x)$  に属する組成率を  $F(x)\Delta x$  とすれば、

$$F(x)\Delta x = \sum_{(t)} A_t P_t(x)\Delta x \dots\dots\dots(1)$$

$P_t(x)$  の値は同一年令の魚体の体長の分布形がわかれば知ることが出来るから、 $A_t$  を未知数として最小自乗法により解くことが出来る<sup>(1)</sup>。

(ii) 各体長階級毎に年令組成をしらべ、これを全変域に引き直す<sup>(2)</sup>。すなわち、体長範囲  $(x, x+\Delta x)$  に属するものの中で年令  $t$  なるものの占める割合を  $f_x(t)$  とし、 $F(x)$ 、 $A_t$  等を前と同じ意味に用いるとすれば、

$$A_t = \sum_{(x)} F(x) f_x(t)\Delta x \dots\dots\dots(2)$$

となる。解析的に扱うときは  $\Delta x \rightarrow 0$  として、(2)は、

$$A_t = \int_{(x)} F(x) f_t(x) dx \dots\dots\dots(3)$$

とする方がよい。

## 2. 第 1 法 による 場合 の 吟 味

この場合の標本採集は二重抽出にすることが出来る。すなわち、体長組成推定用の標本と、体長一年令の關係を知るための標本は独立にとることが出来る。体長分布を知るために抽出した資料を全部用いるか、又はこの中より副次抽出によつてとる方がよいであろうが、イワシの如く鱗の剥げ易い魚種にあつては、このようにして得られた個体が必ずしも検鱗に都合がよいとは限らないので、むしろとり易い方法で別にとることにした。この際、同一年令に属する体長の分布が正規型であれば、この特性をあらわす母数、すなわち母平均と母標準偏差から推定することが出来、又、この標本値は安定がよいので、これを推定するための標本をとることは労力的には相当に容易であろう。

	2 才	3 才	4 才	5 才
$m_t$	19.5	21.0	21.5	22.6
$\sigma_t$	0.93	0.73	0.57	0.57
個体数	593	480	260	120

日本海沿岸各府県への委託調査 (1950年) によつて得られた資料を使つて上述の事実を検して見ると、略々近似的に成立することを知つた<sup>(3)</sup>。その各年令に対する不偏推定量 (標準偏差については標本数が相当多いので一致統計量も同一である) を左に示す。厳密に

いへば、生長度は地域によつて異なるのでこのような取扱は各地域毎になすべきである<sup>(4)</sup>。

このとき  $P_t(x)$  は次の形になる。

$$P_t(x) = \frac{1}{\sqrt{2\pi} \sigma_t} \exp. -\frac{(x-m_t)^2}{2\sigma_t^2} \dots\dots\dots(4)$$

よつて (1) は、

$$F(x) \Delta x = \sum_t A_t \cdot \frac{1}{\sqrt{2\pi} \sigma_t} \exp. -\frac{(x-m_t)^2}{2\sigma_t^2} \Delta x \dots\dots\dots(5)$$

基準方程式を作ると、

$$\sum_x F_x \cdot \frac{1}{\sqrt{2\pi} \sigma_t} \exp. -\frac{(x-m_t)^2}{2\sigma_t^2} \Delta x = \sum_t \sum_x A_t \frac{1}{2\pi \sigma_t \sigma_t'} \exp. -\left[ \frac{(x-m_t)^2}{2\sigma_t^2} + \frac{(x-m_t')^2}{2\sigma_t'^2} \right] \Delta x$$

この左辺は実際の値を計算して求めなければならないが、右辺の各係数は変形すれば簡単な形になる。すなわち、 $\Delta x \rightarrow 0$  とすれば、

$$\lim_{\Delta x \rightarrow 0} \sum_x A_t \cdot \frac{1}{2\pi \sigma_t \sigma_t'} \exp. - \left[ \frac{(x-m_t)^2}{2\sigma_t^2} + \frac{(x-m_t')^2}{2\sigma_t'^2} \right] \Delta x = A_t \frac{1}{2\pi \sigma_t \sigma_t'} \int_{-\infty}^{\infty} \exp. - \left[ \frac{(x-m_t)^2}{2\sigma_t^2} + \frac{(x-m_t')^2}{2\sigma_t'^2} \right] dx \dots (6)$$

$t=t'$  のとき (6) は、

$$P(t, t) = \frac{1}{2\pi \sigma_t^2} \int_{-\infty}^{\infty} \exp. - \frac{(x-m_t)^2}{\sigma_t^2} dx = \frac{1}{2\sqrt{\pi} \sigma_t} \dots (7)$$

$t \neq t'$  のとき

$$P(t, t') = \frac{1}{2\pi \sigma_t \sigma_t'} \int_{-\infty}^{\infty} \exp. - \left[ \frac{(x-m_t)^2}{2\sigma_t^2} + \frac{(x-m_t')^2}{2\sigma_t'^2} \right] dx = \frac{1}{\sqrt{2\pi(\sigma_t^2 + \sigma_t'^2)}} \cdot \exp. - \left[ -\frac{1}{2} \frac{(m_t - m_t')^2}{(\sigma_t^2 + \sigma_t'^2)} \right] \dots (8)$$

すなわち  $\sqrt{\sigma_t^2 + \sigma_t'^2}$  を標準偏差とし、 $m_t - m_t'$  を平均とする正規分布函数と同型であるから、正規分布の表を用いて容易に求めることが出来る。

すなわち  $\frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{-\frac{y^2}{2}} = \varphi(y)$  とすれば、基準方程式は次の形になる。

$$E(t): \quad \sum_x \frac{F(x)}{\sigma_t} \varphi\left(\frac{x-m_t}{\sigma_t}\right) = A_t \cdot \frac{1}{2\sqrt{\pi}\sigma_t} + \sum_{t'} A_t' \frac{1}{\sqrt{\sigma_t^2 + \sigma_t'^2}} \times \varphi\left(\frac{m_t - m_t'}{\sqrt{\sigma_t^2 + \sigma_t'^2}}\right) \dots (9)$$

この場合、ダツシュは異なる年齢  $t'$  の組合せによつて出来た項を示す。

このようにして出来た基準方程式を解いて得られた  $A_t$  の最確値に誤差を互する原因として 2 つの原因がある。

(A) 体長組成  $F(x)$  に誤差のあること、この場合には同一年令内の体長分布を定める  $m_t, \sigma_t$  は確定しているとする。

(B)  $m_t, \sigma_t$  の推定値の Sampling Error によるもの。

(A) の場合：基準方程式を普通の形に書きなおして、

$$l_1 = A_1 P_{(11)} + A_2 P_{(13)} + \dots$$

$$l_2 = A_1 P_{(21)} + A_2 P_{(22)} + \dots$$

$$\text{ここに } l_t = \sum_x F_x \frac{1}{\sigma_t} \varphi\left(\frac{x-m_t}{\sigma_t}\right)$$

この場合  $A_t$  の標準誤差  $\epsilon A_t$  は

$$\epsilon^2 A_t = \epsilon^2 \times \frac{D_{tt}}{D} \dots (10)$$

但し  $D = \begin{vmatrix} P_{(11)} & P_{(12)} & \dots \\ P_{(21)} & P_{(22)} & \dots \\ P_{(22)} & P_{(23)} & \dots \end{vmatrix}$  即ち  $P_{(ii)}$  を主値とする行列式、また  $D_{ii}$  はこの行列式の  $P_{(ii)}$

の小行列式である。又  $\epsilon^2$  は体長組成値  $F(x)\Delta x$  が各階級について等しい標準誤差  $\epsilon(F(x))$  を有するときの標準誤差である。

1951年大羽イワシ調査(新潟)の資料を例にとると、各体長組成の実測精度  $\frac{\epsilon F(x)}{F(x)}$  は単純抽出とすれば mode で 0.05 程度、両端で 0.7 程度である。したがつて、体長組成推定値の標準誤差は下表のようになり、厳密には等しくはないが、大体の目安をつけるため大きく見積つて 0.007 とおく。尙副次抽出とすれば約 4 倍になり 0.03 とおいて差支ないであろう。

$x$	$Fx$	$\frac{\epsilon Fx}{Fx}$	$\epsilon Fx$	$x$	$Fx$	$\frac{\epsilon F(x)}{F(x)}$	$\epsilon F(x)$
17.5	0.002	0.650	0.001	21.5	0.109	0.074	0.008
18.0	0.010	0.250	0.003	22.0	0.074	0.092	0.007
18.5	0.086	0.136	0.005	22.5	0.039	0.128	0.005
19.0	0.087	0.083	0.007	23.0	0.016	0.244	0.004
19.5	0.140	0.064	0.009	23.5	0.007	0.767	0.005
20.0	1.198	0.050	0.009	24.0	0.002	0.500	0.001
20.5	0.169	0.057	0.008	24.0			
21.0	0.111	0.070	0.008	24.5			

又 5 才以上のものは僅かであるから 行列式を作るときに 省略すると未知数は  $A_1, A_2, A_3$  の 3 個で夫々 2 才, 3 才, 4 才のものに相当する。

基準方程式の係数の行列式は

$$D = \begin{vmatrix} 0.301 & 0.153 & 0.035 \\ 0.153 & 0.380 & 0.246 \\ 0.305 & 0.246 & 0.490 \end{vmatrix} = 0.030$$

$$D_{11} = 0.095 \quad \frac{D_{11}}{D} = 3.14 \quad \epsilon A_1 = 0.03 \times \sqrt{3.14} = 0.053$$

$$D_{22} = 0.1220 \quad \frac{D_{22}}{D} = 4.06 \quad \epsilon A_2 = 0.03 \times \sqrt{4.06} = 0.061$$

$$D_{33} = 0.0694 \quad \frac{D_{33}}{D} = 2.30 \quad \epsilon A_3 = 0.03 \times \sqrt{2.30} = 0.045$$

$A_1 = 0.26 \quad A_2 = 0.53 \quad A_3 = 0.14$  とすると

$$\frac{\epsilon A_1}{A_1} = 0.20 \quad \frac{\epsilon A_2}{A_2} = 0.11 \quad \frac{\epsilon A_3}{A_3} = 0.30$$

となる。すなわち、体長組成自体の *mode* に 20% 程度の誤差があるときは、年齢組成は 10 ~ 30% の誤差 (絶対値にして 5% 程度の誤差が生ずる)

(B) 統計量  $m_i, \sigma_i$  の Sampling Error のあるとき、

$m_i, \sigma_i$  を標本値より ( $m_i, S_i$ ) によつて推定するとき、この標本分散を見ると、

$$\left. \begin{aligned} \sigma_{m_i} &= \frac{\sigma_i}{\sqrt{n}} \\ \sigma_{S^2} &= \frac{\sqrt{2(n-1)}}{n} \sigma_i^2 \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots (11)$$

(S の分散より  $S^2$  の分散が扱い易い)

又  $E(m_i) = m_i \quad E(S^2) = \sigma^2$  ( $n$  は大体 30 より大)  $\dots\dots\dots (12)$

すなわち  $m_i, \sigma_i^2$  の分散はどちらも  $\sigma_i$  と標本の大きさのみによつている。

$\sigma_i, n$  と  $\sigma_{m_i}, \sigma_{S^2}$  の関係を示すと下の様になる。

$\sigma_{m_i}$				
$n \backslash \sigma_i$	0.5	0.7	1.0	
50	0.07	0.10	0.14	
100	0.05	0.07	0.10	
500	0.02	0.03	0.04	

$\sigma_{S^2}$				
$n \backslash \sigma_i$	0.5	0.7	1.0	
50	0.04	0.13	0.19	
100	0.03	0.02	0.04	
500	0.01	0.44	0.02	

これによると  $\sigma_{m_i}$  は標本数が 100 程度で測定誤差に入るが、 $\sigma(\sigma_i^2)$  を測定誤差  $(0.1)^2=0.01$  以内に入れるには 500 の標本でも十分とはいえない。今扱っている例では標本数は相当大であるから  $\sigma_{m_i} = 0.04$   $\sigma_{\sigma_i} = 0.04$  位であらうが、各地域毎に推定するときは標本数は 100 程度で  $\epsilon_{m_i} = 0.07$   $\epsilon_{\sigma_i} = 0.05$  位であらう。 $m_i$ ,  $\sigma_i^2$  に、したがってこの程度の誤差を生ずるものとし、 $\epsilon_{m_i}$ ,  $\epsilon_{\sigma_i^2}$  とかけば、これ等が  $P(t|t')$  等に与へる影響は、

$t=t'$  のとき

$$P(t|t') = \frac{1}{2\sqrt{\pi}} \frac{1}{\sigma_i}$$

$$\epsilon^2 P(t|t') = \left( \frac{dP(t|t')}{d\sigma_i^2} \right)^2 (\epsilon \sigma_i^2)^2 = \left( \frac{-1}{4\sqrt{\pi}} \frac{1}{\sigma_i^3} \right)^2 (\epsilon \sigma_i^2)^2 = \frac{1}{16\pi \sigma_i^6} \cdot (\epsilon \sigma_i^2)^2 \dots \dots \dots (13)$$

$t \neq t'$  のとき

$$P(t|t') = \frac{1}{\sqrt{\sigma_i^2 + \sigma_{i'}^2}} \varphi \left( \frac{m_i - m_{i'}}{\sqrt{\sigma_i^2 + \sigma_{i'}^2}} \right)$$

$$(\epsilon P(t|t'))^2 = \epsilon^2 P(t|t')^2 = \left( \frac{\partial P(t|t')}{\partial m_i} \right)^2 (\epsilon^2 m_i) + \left( \frac{\partial P(t|t')}{\partial m_{i'}} \right)^2 (\epsilon^2 m_{i'}) + \left( \frac{\partial P(t|t')}{\partial \sigma_i^2} \right)^2 (\epsilon^2 \sigma_i^2) + \frac{\partial P(t|t')}{\partial \sigma_{i'}^2} (\epsilon \sigma_{i'}^2)^2 \dots \dots \dots (14)$$

$$\frac{\partial P(t|t')}{\partial m_i} = \frac{1}{\sigma_i^2 + \sigma_{i'}^2} \varphi' = - \frac{\partial P(t|t')}{\partial m_{i'}}$$

$$\left( \frac{\partial P(t|t')}{\partial m_i} \right)^2 = \left( \frac{\partial P(t|t')}{\partial m_{i'}} \right)^2 = \frac{1}{(\sigma_i^2 + \sigma_{i'}^2)^2} (\varphi')^2 \dots \dots \dots (15)$$

$$\frac{\partial P(t|t')}{\partial \sigma_i^2} = \frac{\partial P(t|t')}{\partial \sigma_{i'}^2} = \frac{1}{2} \frac{(m_i - m_{i'})}{(\sigma_i^2 + \sigma_{i'}^2)^2} \varphi'$$

$$\left( \frac{\partial P(t|t')}{\partial \sigma_i^2} \right)^2 = \left( \frac{\partial P(t|t')}{\partial \sigma_{i'}^2} \right)^2 = \frac{1}{4} \frac{(m_i - m_{i'})^2}{(\sigma_i^2 + \sigma_{i'}^2)^4} (\varphi')^2 \dots \dots \dots (16)$$

$$\epsilon^2 P(t|t') = (\varphi')^2 \times \left\{ \frac{\epsilon^2 m_i^2 + \epsilon^2 m_{i'}^2}{(\sigma_i^2 + \sigma_{i'}^2)^2} + \frac{1}{4} \frac{(m_i - m_{i'})^2}{(\sigma_i^2 + \sigma_{i'}^2)^4} (\epsilon \sigma_i^2 + \epsilon \sigma_{i'}^2) \right\} \dots \dots \dots$$

但し  $\varphi'$  は  $\frac{m_i - m_{i'}}{\sqrt{\sigma_i^2 + \sigma_{i'}^2}}$  における値を示す。

$$(\epsilon^2 m_i)^2 + (\epsilon^2 m_{i'})^2 = (0.07)^2 \times 2 = 0.0098$$

$$(\epsilon^2 \sigma_i^2) + (\epsilon^2 \sigma_{i'}^2) = 2 \times (0.05)^2 = 0.005$$

これ等に夫々の値を代入すると、

$$\epsilon^2 P(11) = \frac{4\sigma_i^2}{16\pi\sigma_i^6} = \frac{(0.05)^2}{16 \times \pi \times (0.93)^6} = 0.0000765$$

$$\epsilon^2 P(22) = \frac{(0.05)^2}{16 \times \pi \times (0.73)^6} = 0.000325$$

$$\epsilon^2 P(33) = \frac{(0.05)^2}{16 \times \pi \times (0.57)^6} = 0.00131$$

$$\epsilon P(11) = 0.0087$$

$$\epsilon P(22) = 0.0181$$

$$\epsilon P(33) = 0.037$$

このようにパラメータに誤差のある場合の  $A_t$  の誤差について正式の方法<sup>(6)</sup>で解くことも出来るが、計算が甚だ煩雑であるので直接計算によつて見当をつけた。

$\Delta D$  を標準誤差ではないが、行列式の各要素が  $\epsilon p_{i'}$  ずつ増したときの行列式の値の増分とすれば

	P(12)	P(13)	P(23)
$m_i - m_{i'}$	1.6	2.5	0.9
$\frac{(m_i - m_{i'})^2}{4}$	0.64	1.31	0.205
$\sigma_i^2 + \sigma_{i'}^2$	1.398	1.190	0.858
$(\sigma_i^2 + \sigma_{i'}^2)^2$	1.954	1.416	0.736
$(\sigma_i^2 + \sigma_{i'}^2)^4$	3.818	2.005	0.541
$\varphi$	0.154	0.035	0.247
$\varphi'$	-0.209	-0.082	-0.242
$(\varphi')^2$	0.0437	0.0067	0.0585
$\frac{\epsilon^2 m_i + \epsilon^2 m_{i'}}{(\sigma_i^2 + \sigma_{i'}^2)^2}$	0.005	0.007	0.0132
$\frac{1}{4} \frac{(m_i - m_{i'})^2}{(\sigma_i^2 + \sigma_{i'}^2)^4}$	0.167	0.650	0.379
$\times (\epsilon \sigma_i^2 + \epsilon \sigma_{i'}^2)$	0.00083	0.0032	0.0189
{ }	0.0058	0.0102	0.0320
$(\varphi')^2$ { }	0.00029	0.00006	0.00187
c	0.014	0.0008	0.045

$$D + \Delta D = \begin{vmatrix} 0.301 + 0.009 & 0.153 + 0.014 & 0.035 + 0.048 \\ 0.153 + 0.014 & 0.380 + 0.018 & 0.246 + 0.045 \\ 0.035 + 0.008 & 0.246 + 0.045 & 0.490 + 0.097 \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} 0.310 & 0.167 & 0.043 \\ 0.167 & 0.398 & 0.291 \\ 0.043 & 0.291 & 0.527 \end{vmatrix} = 0.0275$$

$$\frac{\Delta D}{D} = \frac{0.0301 - 0.0275}{0.0301} = 0.086$$

即ち 8 ~ 9 % の誤差が生じ得る、又  $A_t$  をとく方程式の分子の行列式もやはり同程度の誤差があるとすれば、したがって  $A_t$  の誤差百分率は分母子の誤差の百分率の和として 20% 程度が予想される。

このような大きな誤差を生ずる原因は  $\epsilon P(12)$ ,  $\epsilon P(23)$  の如く相隣る 2 年の生長 (殊に高年の) に関係ある誤差で、これを小さくするには  $\epsilon m_t$ ,  $\epsilon \sigma_t^2$  をもつと小さくしなくてはならない。しかし、標本の測定法自身が誤差を含んでいるので、標本を多くしても効果はさしてあがらず、又高年齢のものをこのように数多くすることは困難であらう。このように、体長組成の誤差、パラメーターの誤差の 2 つの原因によつて、相当大きな誤差を有するので、この方法で年齢組成を求めることは危険である。

### 3. 第 2 法による場合の吟味

この場合は各体長階級毎に、その年齢組成を知るのであるから、年齢査定用の資料は、体長で層別した中より無作為にとらねばならず、即ち体長組成用資料より、副次抽出によりとるか、又は体長組成用資料を全数調査する必要がある。

このとき、

$$A_t = \sum_x F(x) f_x(t) \Delta x \dots \dots \dots (2)$$

又は

$$A_t = \int F(x) f_x(t) dx \dots \dots \dots (3)$$

一つの体長範囲については、

$$\Delta A_t = F(x) f_x(t) \Delta x \dots \dots \dots (18)$$

$$\frac{\epsilon \Delta A_t}{\Delta A_t} = \frac{\epsilon F(x) \Delta x}{F(x) \Delta x} + \frac{\epsilon f_x(t)}{f_x(t)} \dots \dots \dots (19)$$

$F(x) \Delta x = P(x)$  とかければ、

$$\frac{\epsilon \Delta A_t}{\Delta A_t} = \frac{\epsilon P(x)}{P(x)} + \frac{\epsilon f_x(t)}{f_x(t)} \dots \dots \dots (20)$$

しかるに  $\frac{\epsilon P(x)}{P(x)}$  は単純抽出の場合は  $\sqrt{\frac{1-P(x)}{NP(x)}}$  ( $N$  は全標本数)

$$\frac{\epsilon f_x(t)}{f_x(t)} = \sqrt{\frac{n_x - n_x(t)}{(n_x - 1)n_x(t)}} \cdot \frac{1 - f_x(t)}{f_x(t)} \dots \dots \dots (21)$$

よつて

$$\frac{\epsilon \Delta A_t}{\Delta A_t} = \sqrt{\frac{1-P(x)}{NP(x)}} + \sqrt{\frac{n_x - n_x(t)}{n_x(t)(n_x - 1)}} \cdot \frac{1 - f_x(t)}{f_x(t)} \dots \dots \dots (22)$$

但し

$$\epsilon^2(A_t) = \sum_x \epsilon^2 \Delta A_t$$

$$\frac{\epsilon^2 A_t}{A_t} = \frac{\sum_x \epsilon^2 \Delta A_t}{A_t} \dots \dots \dots (23)$$

$f_x(t)$  を前と同じく 1950 年委託調査によるものを用い、1951 年の新潟の体長組成によつて計算を試みた。勿論この  $f_x(t)$  は前の  $P_t(x)$  のように安定したものではないからこのようにして得られた

$A_t$  の値は正しくはなく、第1法により求められたものと比較して論ずることは出来ず、単に一つの計算例として誤差の目安を与えるものにすぎない。尙  $N=1000$   $t=2$  (2才) として年令は全数調査とした例である。

$t=2, N=1000$  としたときの例

$x$	$P_x$	$f_x(t)$	$n_x$	$\frac{\sigma P(x)}{P(x)}$	$n_x(t)$	$\frac{\epsilon f_x(t)}{f_x(t)}$	$\frac{\epsilon \Delta A_t}{\Delta A_t}$	$\epsilon \Delta A_t$
17.5	0.002	0.80	2	0.705	2	0	0.705	1.4
18.0	0.010	0.80	10	0.314	8	0.120	0.434	3.5
18.5	0.086	0.93	86	0.105	84	0.002	0.107	9.0
19.0	0.087	0.92	87	0.100	81	0.002	0.102	8.2
19.5	0.140	0.87	140	0.078	121	0.046	0.124	15.0
20.0	0.198	0.81	198	0.050	160	0.051	0.101	16.0
20.5	0.169	0.59	169	0.054	102	0.130	0.184	18.6
21.0	0.111	0.30	111	0.090	33	0.242	0.332	11.0
21.5	0.109	0.06	109	0.090	8	0.412	0.502	4.2
22.0	0.074	0.01	74	0.112				
22.5	0.039		39	0.157				
23.0	0.016		16	0.248				
23.5	0.007		7	0.376				
24.0	0.002		2	0.706				
計					580			

$$\Sigma \epsilon^2 \Delta(t) = \epsilon^2 \Delta t = 105.500$$

$$\epsilon \Delta t = 32.3$$

$$\frac{\epsilon \Delta t}{\Delta t} = \frac{32.3}{580} = 0.056$$

	$\Delta t$	$\frac{\Delta A_t}{\Delta t}$		
		$N=100$	1500	2000
2才	0.58	0.056	0.044	0.039
3才	0.29	0.102	0.084	0.072

これは体長組成用資料が単純抽出されたものであり、又この資料を全部体長別に年令組成をしらべるものとしての計算である。実際に単純抽出でなく、日、船、容器、魚体という多段抽出を行ひ、又令査定用の資料も、体長組成用資料よりの副次抽出である。(この場合は第1法の場合と異り、各体長階級別の母集団年令組成

が正しく保たれるように完全な無作為抽出をしなくてはならない。) このときは第1法同様、はるかにこの誤差が大きくなり、やはり20~30%にもなることが予想される。ことに高年令のものにおいて  $\frac{1-f(t)}{f_x(t)}$  の値が大きくなつて精度を落す。(  $n_x$  が5より小さなきは、  $\epsilon \Delta A$  はこの値よりやや少くする必要がある。) 結局この方法によるときは、年令査定法の標本を得る労苦と必要な注意は増大する。結果の精度においては、必ずしも第1法に比して遙かにすぐれているとはいえない。

#### 4. 直接推定法

以上の如く、体長と年令との関係から間接に推定することが困難であるとすれば、直接に年令査定

法の資料を無作為標本として採集して年齢組成を直接に推定する必要がある。この場合の標本数，精度について考える。

体長組成を求めるための標本数設計の場合と同じく

$$\epsilon^2 = \frac{N-n}{n(N-1)} \frac{1-P}{P} \dots\dots\dots (24)$$

(但し  $N$  は母集団の大きさ， $n$  は標本数， $p$  は求める年齢組成の百分率)  $N \rightarrow \infty$

$N \rightarrow \infty$  とすれば

$$\epsilon_j^2 = \frac{1-P}{Pn}$$

$\epsilon$	$p$	0.5 2才	0.2 3才	0.1 4才	0.05
0.2		25	100	135	475
0.1		100	400	900	1900
0.05		400	1600	3600	7600

2才に於て  $P = \frac{1}{2} \sim \frac{1}{5}$

3才 "  $P = \frac{1}{2} \sim \frac{1}{10}$

4才 "  $P = \frac{1}{10} \sim \frac{1}{20}$

この場合，標準誤差を 2~5%におくことにすれば

(4才では 1~2%)

$$P = \frac{1}{2} \quad \epsilon = 0.05 \sim 0.1 \quad n = 100 \sim 400$$

$$P = \frac{1}{5} \quad \epsilon = 0.1 \sim 0.2 \quad n = 100 \sim 400$$

$$P = \frac{1}{10} \quad \epsilon = 0.2 \sim 0.1 \quad n = 135 \sim 900$$

$$P = \frac{1}{20} \quad \epsilon = 0.2 \quad n = 475$$

すなわち 500 個の標本を無作為抽出すればよい。ただしこれは単純抽出法の場合で，多段抽出の場合は  $\epsilon$  の値が数倍に増大することが予想されるので，体長調査と同じく，1回の測定数を減じても測定回数を大にする必要がある。

### 5. 結 論

以上のことより次の結論を得る。

- (1) 年齢組成の推定は，体長より間接に知るのは困難で直接査定に向う必要がある。
- (2) この場合の標本数は，1母集団について 500 以上を必要とし，体長組成用標本より副次抽出によるのでは不十分である。
- (3) したがって調査計画は，年齢査定用標本を直接に無作為抽出することが出来るように作らねばならぬ。

### 6. 附 記

以上は各年齢組成を独立に推定することを目的とした，年齢分布に，例えば指数型というような条件があり，全体を通じての生残率を計算しようというような時は各年齢毎の精度はもつと落してもよいであろうが，イワシの場合は問題になるのは高年魚よりは 2~3才の各年齢組成より発生年級の変動等を知るのが目的であるから，主年齢群の組成は独立にある精度をもつて推定する必要がある。



附記 この研究は、全国イワシ資源調査担当者会議の決定による全国調査の一環をなすものであり、岡地伊佐雄氏の熱心な助力と赤尾多喜子嬢の計算の労苦に感謝する。

## 文 献

- (1) O. E. SETTE ('50): Structure of a Research Program to Determinate How Fishing Affects in Resources Sepecial Scien. Rep. No. 15, U. S. F. W.
- (2) HODGSON. ('40): Improved Sampling Method. Lowestoft.
- (3) 伊東外 2 名 ('51): 日本海北部における洄游性魚類資源調査, 日水研報 No. 1,  
" 昭和25年イワシ対策調査概報
- (4) SETTE ('50): 前 述 "
- (5) 山中一郎 ('51): 体長組成の取まとめ方について, 底資調研連 7,
- (6) 水野善右エ門 ('51): 測定値整理法,
- (7) 土井長之 ('48): 生残率を求める推計学的方法, 日水誌 Vol. 14,